戦後の大阪桃山病院

写真は『大阪市立桃山病院 100 年史』1987 年。正面すこし左に病院、その右に日赤病院が見える。先日、鶴橋から現地に向かったが、今は高層マンションやスーパーが立ち並び、その一角に慰霊碑がある。『新修大阪市史』9 巻に、標題について記されており、抜粋して紹介する。

敗戦の翌年である昭和 21 年の 12 月、それまで伝染病専門病院であった桃山病院の建物の一部（北館と中央館）を利用して、桃山市民病院が創設されることとなった。当時、連合国軍の占領政策における衛生指導の徹底と、市街地復興計画が推進されるなかで道路・公園・上下水道が整備されることを考慮すると、伝染病患者が恒常的に増加するという予測はほとんどたてにくい状況にあった。加えて、2 年連続して夏期の患者が減少していた。他方、衣・食・住が窮乏するなかで公的な一般医療施設の充実が必要とされていたので、桃山病院では余剰のベッド・医師・看護婦・薬剤師・事務員等によって、別に市民病院を運営することになったのである、伝染病患者の多少によって桃山病院の職員の一部を市民病院に移動したり、逆に一時的に市民病院を閉鎖することもありうるという、やや特殊な市民病院の創設であった。

戦後の伝染病は昭和 40 年代に入って、しだいに減少し始める。桃山病院の年間入院患者も 42 年以降 1000 人を割り、1 日平均在院患者も 20 人前後で推移した。集団発生による入院患者もほとんど 100 人以下であり、収容に支障をきたす集団発生も、43 年 2 月の 1 件だけであった。将来、伝染病が増加することもほとんど考えられない状況であった。全国的にも、東京・名古屋・京都・神戸その他古い歴史を持つ伝染病院が次々と市民病院の一分科として姿を消しており、研究診療も全般的に低下傾向をたどっていた。そこで昭和 48 年 4 月 1 日、大阪市は法定伝染病以外に一般感染症患者の外来診療・入院治療を行う「感染症センター」を桃山病院に開設した。感染症センターは、原因不明の熱性疾患、一般感染症・予防接種副反応患者を引き受け、適切な検査・診断・治療を行うとともに、感染症の発生病理学的研究、診断治療方法の研究、検査方法・検査技術の研究教育と情報収集などを行うことを目的とした全国でも最初の試みであった。

感染症センターは、昭和 53 年 12 月から、時代の要請にこたえて内科・小児科の夜間二次救急病院としての役割を果たしてきたが、平成 5 年(1993)12 月「大阪市立総合医療センター」に吸収・統合されている。都島区に建設された市立総合医療センターは、地上 18 階、地下 1 階、敷地面積 2 万 4000 平方メートル、病床数 1096 床の大規模病院である。これによって桃山市民病院・城北市民病院・母子センターおよび桃山病院感染症センターが総合医療センターに吸収統合されている。

（2020 年 5 月 16 日）